

愛友会四国連合会報

第 34 号
56. 4

目 次

電話と無線サービス	松山無線通信部長	二
春遠からじ	小島さとし	二
電電公社人事異動		三
公社だより(年金受給者資格確認)		三
共済会だより(四)		四
表紙のことば	莊野 丹秀	四
短 歌	山内 旬一	四
俳 句	浅倉憲太郎	四
特 集	春にちなんで	五
	井上ひろし 龜山 巖 香西 安夫 竹内 正 地行 祐助 戸倉テルミ 福本 豊 八木 哲	
川 柳	福田秋風郎	七
詩	長島 正雅	七
訃 報		七
随 筆	溝渕道信・田中義隆・山口満夫	八
OBサークルだより		八
えひめ歩こう会記・愛媛電電OB囲碁大会記 徳島眉秋句会・松山友佳里句会 高知やまもも句会		
編集後記		二〇

電話と無線サービス

松山無線通信部長

三好 徹



昨年は公社にとって大変な厄年となりました。資材調達、納付金問題に加え、特に近畿等の不正不当事理問題では公社の信用を失うこととなり、電友会の皆さまにも肩身の狭い思いをさせたことは残念の至りです。日本人社会の通弊とはいえ、公社全体が悪であるかのようなマスコミ等の論調に憤りを覚えると共に、我々自身が萎縮することなく、胸を張って誇りうる公社の多くの面を世間に知って戴くことが大切だと感じております。その意味で手前味噌になりますが、無線サービスの現状を先輩諸兄にご理解頂き、さらにご支援とご協力を賜りたいと考え筆を執った次第です。

公社懸案の二大目標達成後の公社の進路については量から質への転換が叫ばれ、データ通信、画像等の非電話系サービスの発展へ努力が傾注されていますが、これと並んで従来からの電話系サービスの質の充実が重要な課題となります。

無線部門では、市外電話伝送路の約半分とテレビ中継線の全部がマイクロ波方式によって構成され、固定無線の分野が主流をなしてきましたが、最近は無線以外の手段では代替できない移動無線の分野で、各種災害対策、

移動体通信サービス等が脚光をあびています。乗物から加入電話へ接続できる無線電話として古い歴史のあるのは船舶無線電話です。四国に縁の深い瀬戸内海全域の船舶を対象とした内航船舶電話は、昭和39年以降全国沿岸にサービスが拡大され、一昨年三月からはダイヤル自動化サービスも開始しており、手動方式と合わせた加入数は一万を超えています。

ポケットベルは昭和四十三年東京でサービス開始以来、低料金と国民性の適合もあって著しい発展を続け、昨年は全国で百万加入を突破し、二位の米国の約二倍の普及率に達しています。四国では昭和四十七年の高松地区を皮切りに高松、松山、徳島、高知の四地区で四万加入を突破し、さらにサービス地域の拡大を続けております。新型のポケットベルはトランジスタ三千個に匹敵する専用LSI等先端技術の粋を集めたもので、世界一の小形軽量を誇っています。

移動体通信の花形は一昨年暮に東京二十三区でサービス開始した自動車電話です。欧米では三十年以上も前からサービスされてきましたが、我が国では無線周波数の割当に長年月を要したことなどからサービス開始は遅くなりましたが、二回の研究開発を経て技術的には極めて高度の機能をもつ方式となりました。有限の資源である電波の有効利用とサービス地域相互乗入れ可能な広域性が得られたのは、電子交換機の機能拡大と移動無線機に内蔵のIC、超小型計算機と高精度発振器に負う所が大きく、もし同機能のものを二十年前の技術で実現したとすれば、トラックの荷台に積む程の大きさになったと思われまます。LSIを用いた小形化、低コスト化の努力は現在も続けられており、自動車電話の普及、大衆化

に寄与することでしょう。昨年十一月には大阪地区でも自動車電話サービスが開始され、東京周辺部、名古屋地区は本年に予定されており、四国の主要都市への導入も意外と近い将来に実現が期待できそうです。

個人が携帯できる携帯電話は「いつ、どこからでも掛かる」電話の理想形態ですが、自動車電話の小形化はこれに一步ずつ近づくとともにあります。さらに衛星通信の分野でも未だの携帯電話の技術的可能性が明らかになっており、無線屋の夢は今世紀中に現実のものになるうとしております。

春遠からじ

小島 さとし

誰でも知っている言葉である。文字通りに、春という季節への願望を意味するものでないことも知っている。そこには住みにくい社会を、一刻でも早くぐぐり抜きたいという祈りに似たものが、底を流れているのである。人生への闘いを、吾と吾が言葉で、鼓舞激励しているのである。しかも又、そんな励ましにたいした効果のあるものでないことも、衆人は先刻承知のことである。

そういう無駄とも言える言葉を、われわれは日常そこらに吐き散らしながら、与えられた一生を、一日一日消し去っているのである。まことに無意味な営みではないか、と思われが、これが又、凡人の人生であろうか、とも思う。

大正から昭和の初期にかけて、一世を風靡（び）した作家芥川龍之介は、「人生は狂人の主権に成ったオリンピック大会に似たものである」と言った。又、「人生は一箱のマッ

チに似ている。重大に扱うのはばかばかしい。重大に扱わなければ危険である」と言っている。更に又、「人生は落丁の多い書物に似ている。一部を成すとは称し難い。しかしとにかく一部を成している」とも言っている。天才とも言える警句の名人だけに、たったこれだけの短文で、人生の真髄を見事に表現していると思う。所詮人生とは、重大に考えなければならぬ人間最高の命題ではあるが、さりとして、チャランポランにごまかしても、とにかく事足りるのである。

が、そこに重大な問題がひそんでいるのである。謎とも言えるものが隠されているのである。不可解極まるのが人生であり、「如何に生くべきか」と探索思考する過程で、苦悩のあまり無意味な慰みの言葉を吐き散らしながら、うごめいているのが衆愚の姿そのものと考えてよいと思う。

「生きる」ことにごまかしがあつてはならない。真正面から取り組んで行く。回避は許されない。真剣に考え考え、たとえ遅々たる歩みであろうと与えられた一生を生き抜く、これこそ人間の責務と考えるべきである。トンネルには必ず出口がある。遠い彼方に出口の光が見えるものである。厳寒の冬には、草木は死んだようなみすぼらしい姿になっているが、春は必ず来る。たとえ暗中模索の毎日であつても、こうした誠実さを失つてはいけなと思うのである。今日は大寒。厳寒の今年は、まだ春の知らせはない。足摺の椿の便りにも、室戸の蓮華畑の写真にも、今年はまだお目にかからない。

(高知県電電公社退職者の会会長)

電電公社 人事異動 (敬称略)

- 四国電気通信局 副局長
- 監査局長
- 経営調査室長
- 計画部長
- 建築部長
- 高松電話局長
- 四国電気通信局付

- 保全工事事務所長
- 宇和電報電話局長
- 御荘 同
- 今治 同
- 西条 同
- 伯方 同
- 伊予三島同
- 琴平 同
- 善通寺同
- 観音寺同
- 土庄 同
- 内海 同
- 小松島同
- 阿波勝浦同
- 丹生谷同
- 阿波池田同
- 土佐 同
- 佐川 同
- 窪川 同
- 土佐清水同
- 土佐山田同
- 松山電信施設所長
- 高松統制電話中継所長

(五六・二・一三)

- 岩 佐直正
- 阪 井昭二
- 中 昭明
- 関 昭夫
- 上 野正史
- 杉 本典夫
- 矢 野光信
- 二 宮鹿一
- 和 田常一
- 菅 垣英一
- 檜 垣昌孝
- 山 内昌一
- 横 田進
- 越 智忠雄
- 流 徳太郎
- 塚 善一
- 河 野昭雄
- 中 川昭一
- 中 角一
- 田 昇
- 柏 原英夫
- 樋 口巧夫
- 森 幸三
- 青 木昇
- 清 水俊
- 岩 崎武
- 重 見豊
- 山 崎力
- 八 軒一
- 高 瀬昭
- 白 石悟

(五六・二・一六)

- 高知統制電話中継所長
- 松山統制無線中継所長
- 高松 同
- 高知 同
- 中島電報電話局長
- 伊予中山同
- 内子 同
- 城川 同
- 川之江同
- 讃岐三木同
- 高瀬 同
- 引田 同
- 神山 同
- 伊野 同
- 南国 同
- 田野 同
- 田井 同
- 八幡浜統制電話中継所長
- 今治 同
- 新居浜同
- 須崎 同
- 宇和島統制無線中継所長
- 今治 同
- 観音寺同

(五六・二・二四)

- 徳 岡圭三
- 北 哲朗
- 徳 孝敏
- 矢野 賢
- 渡 部俊夫
- 山 本邦彦
- 三 上喜弘
- 市 川秋夫
- 田 中 英男
- 中 須賀忍
- 北 谷廣
- 井 上勇
- 大 岩堯
- 田 中 憲之
- 徳 廣長
- 百 田彰
- 宮 岡計
- 菊 池昌
- 長 田昌
- 石 田幸
- 篠 崎英夫
- 山 本 和治

公社だより

生きている証拠を

四月は年金受給者の受給資格を確認する月です。さきに共済組合四国支部から送付された年金受給者年間提出書類一覽表(第三項)参照のうえお忘れなく、期日までに必ず出して下さい。おくれると、年金の支払を受けられなくなることもあります。

○証明は五十六年四月一日以降であること
 ○提出期限 五十六年四月十五日(必着)
 ○提出先 千七百〇 松山市一番町四十三
 四国電気通信局職員部厚生課共
 済係

共済会だより (注)

電気通信共済会四国支部
 福祉相談所

◎退職者談話室の設置計画!!

共済会では、退職者の方がたの相互交流や
 教養娯楽の場として気軽に利用できる退職者
 談話室の設置について、次のような構想で諸
 般の準備を進めております。

記

一、場 所 松山市千舟町四丁目四一六

共栄興産ビル六階

(市駅から徒歩三分、紀伊国屋書店の東、前)

二、開設予定 昭和五十六年五月上旬

三、施設概要 八〇㎡(約二四坪)和室十五
 帖、その他、碁、将棋、麻雀、
 生花、茶等教養娯楽品を備え
 ます。

四、利用時間 午前一〇時から午後六時まで
 (日曜・祝日は休みます)

五、その他 ご利用は無料です。
 管理人を配置します。

開設にあたっては、別途詳細についてお知
 らせします。

◎昭和五十六年度退職者文化活動計画のあらま

し

概要、次のような計画を進めたいと考えて
 います。多数の方々の参加を期待しています
 一、文化講演会

昨年に準じ四県庁所在地で開催します。

二、電電OB大学(園芸科)

今年度は、実技、実習、見学を主体に実施
 するよう計画しています。年間スケジュール
 等は別途お知らせします。

三、サークル援助

昨年同様、五五年度中の活動実績と、五六
 年度の予定計画を提出していただき、その状
 況により援助額を決定することにしていま
 四、趣味の作品展

詳細な具体策は検討中ではありますが、一昨
 年に準じ退職者の多い松山市で開催する計
 画を進めております。

◎医療共済掛金の改訂

加入者掛金、現行一人年額、四、七〇〇円
 が昭和五十六年四月一日から六、〇〇〇円に改
 訂されました。二年掛、五年掛等予納金の割
 引率は従来どおり一年につき五%です。

なお、医療費の支払いは現行どおり二分の
 一が加入者負担です。

諸物価高とうの折柄大変恐縮でございます
 が、医療共済制度の趣旨をご理解いただきご
 協力くださいますようお願いいたします。

表紙のことば

高松港 莊野 丹秀(内海)

四国の玄関・港にお城のある街。

高松港は人それぞれに想出のあるところ。
 四国に渡る旅人はかならず通る港
 そして白いかもめと、連絡船がとても
 調和して美しい港。

短歌

蘭の花

山内 旬一(松山)

蘭の花十あまり日ににほひ立つこの花に似る
 とおもふ人あり

今日行かむいや明日にせむと怠りてこの頃吾
 に日のたつ早し

立つ雲の上に高繩の峰出でてパラボラ塔のパ
 ラボラ親し

減量せば長生き出来るとふたたびも医師宣ら
 しまして薬たまはず

道後平野を統ぶるが如き御幸寺山松枯れしよ
 り峰は細りぬ

俳句

春遠し

浅倉 憲太郎(高知)

縁先に鬘髪梳く寒椿

日溜りの猫慌ておりさざめ雪

友逝きて早ひと年や蘭の花

鶯の聲とのはず春遠し

札所出る同行二人春の暮

特 集

春
ちなんんで
春 愁

井 上 ひろし (伊野)

山と太陽と海が影響し合って、複雑で、不思議な季節現象を生み出す日本の、季節の移り変りと、喜怒哀楽感を結びつけた詩、俳句では難解な言葉が沢山使われている。たとえば春の季節のものでも、霧(つちふる)料峭(りょうしやう)春陰(しゅんいん)春愁(しゅんしゅう)などその例である。

「霧」とは、黄塵とよばれる大陸の黄砂が春の季節風によって日本の上空にかかる現象であり、「料峭」とは、蘇東坡の詩「料峭として春寒し」から来た語で、春の風といえども余寒を感じるということ。「春陰」は花曇りといわれ、桜の咲く頃の薄明るい曇天のことである。

「春愁」というのは、「春意」とか、「春の恨み」とかよばれ、なんとなく心が浮き立つ季節である半面、何かにつけて物憂く、哀愁を覚えるものがある、われ知らず物思いにふけたりすることがあり、こういう春の哀れや、物思いを言うのである。

暦のうえで二月から四月へかけての春は、現職者にとってはいろいろの面での春愁を、否応なしに経験させられた季節であり、退職したらしたで、また別の春愁を噛みしめることの多い季節である。

「春愁」とは、生涯を通じて春ともなれば、必ず身にまつわりつく季節感であり、また美

しく悲しい言葉でもある。

春に思う

亀 山 巖 (丸亀)

この原稿を書くに当って、私は「春」という言葉を、えも知れぬ期待とあこがれの言葉として味わった昔を今静かに思い出ししています。

それは丁度四十年も昔のなつかしい思い出であります。

温暖の地四国から、いきなり酷寒の満州へ現役兵として入隊してからの五年余り、毎年毎年の終りの四月近くになると、もうすぐ春だ、春になる、ということが、言葉ではなく五体で感じる何物かとなって、きまって私の心の中に大きなふくらみとして満ちてくるのであります。

そこには重苦しくつらかった冬が終るといふことが、軍隊というところでよいに強いあこがれとなつて感じたのかも知れませんが、そのうれしさは、現在の私にとって決して味わえない、一種の幸福にも似たものでさえあつたように思えます。

紙をはがすように、昨日まであつた雪があとかたもなく消えている朝、次の日にはうぶ毛に包まれた柳の芽が急にふくらんでいるのに驚き、一陣の風が雪あとの乾いた黄土を、さつと吹き散らしてゆく。

そこにはもうまぎれなく冬が逃げ去って、地上のものすべてが耐えて待った「春」がやってきたのです。

思いっきり空気を吸って、はるか空に向つて叫びたい、これほど感動的な幕開きの一ときが、今の恵まれすぎた私にとって味わえないのが、淋しい気持ちすらします。

待 春

香 西 安 夫 (高松)

昨年四月、四十年余りを過した公社を退職して以来、はや一年になりました。

退職前には折角退職年金も頂けることでもあり、呑気に日々を送っていきたくと考えていましたが、いざ退職してみると趣味も特技も持ちあわせていない身にとっては無聊の感を募らせるのみでした。

春風駘蕩、桜花らんまんの四月にもかかわらず、何か砂漠のなかで一人暮しているような孤独感にさいなまれ、どうにかして張合いのある、意義ある生活を渴望するようになりました。

在職四十余年のなかには戦争による混乱期各地への転勤等もあり、旅行らしい旅行もせず苦勞のかけっぱなしになつている家族への償いも兼ね四国八十八ヶ所巡拝の旅を思いたちました。吉野三郎の流れに沿い、やがて怒濤のほえる室戸、足摺の岬をめぐり、ついには波静かな瀬戸の海辺に至る霊場は、深々と屋なお暗い樹林の蔭に豊を沈め、香煙は死霊を呼んでもうとうと立ち昇り、宗旨は異なっているものの、かわいた心に何かひとつひとつ火をともしていくかのようでした。

在職中津田町の丘にある畑を手にいれていましたが、昨秋にはミニハウスも出来、仮泊の設備も整つたので最近では待望の土いじりに励んでいます。幸い梅、桜、みかん、リンゴ、ピワ等が植えられていますので草花、野菜等の植付けに大童です。もっとも土いじりは全く経験のないことで、植付時期、施肥方法等暗中模索の状態ではありますが、春とともに花も自然も華麗な色、艶美な光りを送っ

てくれるものと、今から期待に胸をふくらませていきます。

生き甲斐

竹内 正(高松)

退職すると何の気兼ねもなく精一杯自分のしたいことを思いつく儘にしよう。まず第一にゴルフをしたい、パチンコもやりたい、映画も見に行こう、旅行もいいな、青春時代にかえって本屋の立読みもするか、孫の守りもしてやるかな、奥の機嫌をとる意味で月がまにも出ようか、と夢は欲張りで楽しかった。一年経って結果はさてどうだっただろう。

計画的ではなかったが好きにならなくなってきた、当初の考えから悔はないが何か満たされないものがあることに気付いた。少年時代から働くということが理屈でなくて生活の一部であったという習性で憧れていた自由と思える毎日が、物足りない寂しいものであるかを知ったのです。それが健康のためでもあり、老化を防ぐ唯一の秘訣であることもうすうすわかりかけてきました。在職中お世話になったS先生の川柳句に「下積みもよし生き甲斐のある仕事」を読んで、あのご高齢のしかも経済的にも精神的にも余裕のある方の「喜寿何んぞ米寿がなんぞ百生さる」の気迫に今更ながら恥しく、私も遅れ馳せながらどんな下積みの仕事でもいい生き甲斐を見つけて第二の人生を生きていこう、こんな気持ちで退職一年目の春を迎えています。

躍動の春

地行 祐助(徳島)

長年お世話になった公社を退職し、徳島電信電話会館に勤務してから早一年、初めのう

ちはなにかと戸惑いがちであったが、今では仕事にも馴れ、元気で勤めている。

会館の仕事は、もっぱらお客様相手の商売であり、利用していただくお客様に、喜んでいただけるサービスの提供をモットーに、従業員一同とともに頑張っている。

ところで、日本の国ほど四季の区別がはっきりしており、住みよい国は世界にはないそうです。四季は春から始まり、夏・秋・冬と移り変っていく。

四季のうちでも春は、森羅万象、特に生物が躍動する時季でもある。二月三日が節分、四日は立春と、暦の上では寒い冬の季節から春への移り変わりである。朝晩の冷え込みは、まだ厳しいが、立春の声を聞いた春は、ぱちりと目を覚し、寒い間じつとがまんしていた野山の草木が一斉に芽をふき出し、冬ごもりしていた虫も、春暖を感じて穴から出てくる。

また四国の春はお遍路さんの鈴の音にはじまるという。近時遍路ブームであり、四国八十八ヶ所参りのお遍路さんの姿が、あちこちに見かけるようになってきた。桜の花もやがて咲くだろう、目の前に春の足音が高鳴っている、私は春が好きである。とにかく春は楽しい季節である。

三日の人

戸倉 テルミ(丸亀)

盆栽の梅の香がほのかに白く匂っていた春寒も遠くへ去り、桜前線の通過する好季節となりました。

退職後、皆さまのお仲間入りをさせていただき早一年目を迎えようとしています。

退職後、私は年老いた母の「たばこ店」の

小さな商売を手伝っています。そのせいか在职時より早起きの習慣が付き、毎日を頑張っております。

春がくると、小学校の低学年のとき、ひらかなから漢字へ進んでいた頃のことをよく思い出します。「三日の人」と書いてなぜ「春」と読むんだろうか。「木」という字は反対に「半」の方がよいのではないか、「日」は「〇」と書けば自然のようであると、今考えると恥しいようなことを、次から次へと考えたものです。やがて成人し、年月を経るにつれていろんな趣味を楽しみ「三日の人」の言葉にぴったりのように数々のお稽古ごとが成就しないで「三日坊主」に終わってしまったことを、今更ながら意気地なしと深く反省させられております。しかし「三日坊主」の経験でもその中には私の趣味に合ったものもあり、これからの心の糧のために牛歩でもよい一つからでも取組んでいきたいと考えております。

また、裏の畠で四季おりおりの花を作り、楽しみ、野菜作りに精を出し、自分なりの健康づくりを心掛け「美と若さ」のために「三日の人」とならないよう肝に銘じている今日この頃であります。

麗春謳歌

福本 豊(小松島)

老境進みゆくにつれて、冬の寒気はひとしお身にしみる思いであるが、それだけに春の訪れを待ち侘びる気持は強まってくるようである。早春三月、小川の水も温みはじめて、寒風にさいなまれていた岸辺の柳も芽ぶくころになると、温暖の南の地方から早くも花便りが届いて、急ピッチで桜前線が北上してく

ると桃、梨の蕾も一斉に綻び初めて、紅白の花の眺めの麗しさにうっとりとなり、生き延びる幸せをしみじみと感じるのである。

文豪夏目漱石の「草枕」の一節に「春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さえも忘れて正体なくなる。ただ菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の声を聞いたときに魂のありかが判然する……」こう思って、こう愉快になるのが詩である」とあったが、若かりしころは深い感動を覚えながら読み返していた記憶が残っている。

しかし、よわい七十路に入った今日では、待ち焦れていた若草萌える陽春の好季節を迎えても、ややもすると睡魔に誘われ正体を失なって、恍惚の人となるのではないかと不安が脳裏を去来するので、衰えはじめた脳細胞を刺激強化して、老化の進行防止のために登山、読書のほか頭の体操として、最近には民族詩型という短歌の学習に取り組んで作歌に努力を傾けているのであるが、百花繚乱の自然の春を讚美するとともに、老いつのりて潤いを失いかけた余生にも、艶やかな人生の春を享受できるように精進を続けたいと念願している。

春の伊予十二薬師まいり

八木 哲 (松山)

お薬師さまは十二の大きな誓願を立てられて如来となられたお方です。特に「あらゆる心身の病をことごとく除く」現世利益の有難い仏様で、天台、真言、曹洞、黄檗の各宗寺院から伊予十二薬師が構成されています。

薬師信仰は古く奈良時代からのもので、各寺院も行基菩薩、弘法大師の開基から鎌倉南

北朝時代の豪族河野氏の開創まで、古刹としてそれぞれ由緒ある寺々です。

車で順拝すれば行程約八十軒六〜七時間分けて徒歩巡拝します。私は四ヶ寺ずつ三日に分けて、うららかな春の野山に抱かれて歩いていると、桃や桜、それに菜種や大根の花が目を楽しませてくれます。幾つかある峠からの瀬戸内海沿岸の眺めは最高です。

厄除薬師一番東林寺、隻手薬師六番香積寺は古来名高く、日光、月光菩薩を脇侍として十二神将の揃っている二番医座寺、景観樹林保護地区に指定されている三番蓮華寺、小野小町、大森彦七伝説の五番正観寺と九番金蓮寺、薄墨桜で有名な四番西法寺、国指定史蹟来住庵跡にある七番長隆寺、星ヶ岡古戦場跡にある八番岡薬師雲門寺、伊予緋鍵谷カナの菩提寺十番長楽寺、弁天山北東の十一番浄明院、正岡子規散策の寺十二番薬師寺と、それぞれ特色があり、寺のゆかりを尋ねるのも興味深いものです。ご一緒しませんか。

毎月十二日に順拝バスが出ており、一月と四月が特に盛大で、納経(軸・帳)もできます。



福田 秋風郎 (松山)

一と月は夢の間今年もう二月

ローンとの苦闘余生の袖カバ

カバ焼きの定価は守り寸を詰め

昭和生れも例外でなし停年期

借りた金返せせば終る恩でなし

詩

早春

長島 正雅 (徳島)

土が動き 梢がほどけ 空が潤む
どうかすると
仲間外れのような綿雲が 驚くほど
身近に止まっていたりする

精霊は 一斉に起って手を伸べ
関を上げて光を呼ぶ
春が来た! 春だ 春だ……

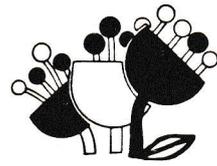
坐臥の節ふしに
何とはなき ときめきが纏うのも
萌える いのちの波動か

絢爛の女神が統べる
鳥に 花に 野に 山に
悔いなき 心の春を
今こそ
精一ばいに讚えよう

訃報

次の方が亡くなりました。謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈り致します。

氏名	死亡月日	行年	所属
川村 重威殿	55.12.10	八五	佐川
植田 貞光殿	55.12.13	七三	松山
栗林貞三郎殿	55.12.14	八一	松山
三木 威殿	55.12.24	七六	徳島
石井 好明殿	56.1.8	七二	松山
松川 綾子殿	56.1.29	六三	多度津
吉成 一殿	56.2.22	六〇	徳島



公衆電話雑感

溝 渕 道 信 (高松)

随 筆

昨年四月、財団法人日本公衆電話会へ就職した関係で、交通信号と同色の赤、青、黄色をした公衆電話についてはいたって関心が深い。

街かどの「ほこりをかぶった青電話」、店の先の「汚れが目立つ赤電話」など、電電公社の代理店からあまり可愛がられていない公衆電話をみると、いささか気にかかるし、「きれいに手入れされた美しい公衆電話」をみると、それにまつわる数々のエピソードなどが心に浮ぶ。

日本は世界でも公衆電話の使いやすい国だと思ふ。十円玉さえあれば全国どこへでもかけられるし、外国のように電話専用貨を使い交換手呼び出し、アルファベットで相手局をまわす、といった面倒なルールはいっさいない。普及(公衆電話の)も都市、農村をとわず行きわたり、他人様の電話を気がねしながら借りるといった話しは、一昔も二昔も前になる。

近年百円玉が使える赤電話、黄電話がお目見えした。「使いやすさ」、「普及」と相まって結構なことだ。願わくばこれに加えて「清掃の行きとどいた、気持ちよく利用できる公衆電話」が、より多く実現するよう期待している。

校 正

田 中 義 隆 (松山)

校正は辛気臭い仕事である。戦前の神戸中央電話局では、月刊の部内誌「美東里」を発行していた。どうしても誤植が減らない校正をしながら、隔靴搔痒の感を深くした。

校正はむろん原稿に忠実でなければならぬ。しかし、それでよいものでもない。執筆者の思い違いで、誤字や誤記がなくもないから油断はできず、絶えず緊張を強いられる。それに訂正する場合、記憶だけではとんだ失敗をするから、手間をいとわずいちいち辞書を引く。たとい駄目押しでも、自分なりに自信が持てるから省けない。

印刷するため、校正用に刷ったものをゲラ刷という。懸命にゲラ刷を校正しながら、自分の未来の人生のゲラ刷があれば、充分に校正するのに、と思ったりする。過去の人生の誤字や誤記は、もうどうしようもないからである。

名 君

山 口 満 夫 (松山)

オークルジョンというのは黄色の一種であって、黄ろい土から作った絵具である。ノアルは黒色のことだが、二つとも絵具としてはいたって安価なものである。そして褪色も変色もしない堅固な絵具である。

凡庸な絵かきがこれを使うとオークルジョンは単なる黄色に過ぎないが、非凡な絵かきがこれを使うと黄土色はたちまち金色に輝きだす。ルノアルはそういう絵具の使い方をする絵かきであった。またチシアンはノアルを使って銀色を出したといわれている。「名

君の人を用ふるや才能を見て長ずるところに従ふ」といわれるが、ルノアルやチシアンはまさに色彩駆使の名君であった。

世の中にはこれと反対に、金粉を使っても泥色にしか見えなかったり、銀を使っても灰色にしか見えない絵かきもいるわけである。企業経営の上では、社員は絵具のようなものである。黄土色の社員を金色に輝やかせ、ノアルの社員を銀色に光らせるのは、マネージャーの頭脳と手腕である。

Aという社員がいた。彼は頭の働きはにぶいが、誠実という美德をもっていた。彼の上司の支配人は、その美德の誠実を取り上げて日々激励した。Aはいよいよ誠実の美德をのばして頭のにぶさをカバーして行った。得意先にも社内でも信頼され、一級のセールスマンの資格を得るようになった。支配人は黄土色を金色に輝やかしたことになる。名君というべきであろう。

OBサークルだより

久万高原を歩いて岩屋寺へ

(第四回えひめ歩こう会記)

四十七名の参加で十一月十六日久万町の古里村を見学、畑野川林道入口から山道を上り、古岩屋からの遊歩道の奥の端に降りかかり古岩屋に出る五軒を歩く。小休止の後六〇〇米の急坂を登って四十五番札所岩屋寺に参詣する七軒余のハードコースを全員元気に踏破して高原の空気を満喫し紅葉の美を鑑賞。

植樹祭の杉林をすぎるときから三坂峠の紅葉はだんだん美しくなった。古里村は久万町が古里保存と、観光のために造ったもので広い

展示館に農家の生活用品を集めている。茅葺の家を移設、馬小屋、足踏臼など広い土地に古里のいろいろのものを設置してありなつかしく見学した。

一行は畑野川林道入口から歩き始めた。先頭、中、しんがり確認リーダーがいるので迷子になる心配はないが石ころが多いので足元に気を配りながら登る。どっちを見ても山と木ばかり、久万地方特有の緑の杉林に紅葉したくぬぎ林の幾何学模様の山を眺めて歩いていと遠くに愛媛ハイランドゴルフコースの美しい山肌が見えて来た。

峠まで約二軒、峠といっても山の中腹だがそこから木立の多い山道を下って遊歩道の奥の入口にたどりついた。

遊歩道は川を右に左に渡りながら木立の中を歩く、川の水は澄み切って清く、せせらぎに落葉を集めて自然そのものである。

岩峰の林立する見事な所では足をとめて眺める。途中白樺の木が数十本道に添って植えてあって目を楽しませてくれた。まだ中木だが大きくなると素晴しくなるねと話しながら下って行く。遊歩道入口近くには紅葉も多秋の太陽に輝いていた。松山の近くにこんな散歩道が欲しいなあと思いつつ古岩屋の国民宿舎にたどりついた。

古岩屋の国民宿舎には、バスの中で山菜料理などの注文をまとめ久万から電話してあった。川魚料理や山菜料理で軽ビールでのごちそうをおしている人、持参の折詰をおいしく食べている人。

次は四十五番札所岩屋寺の登り口に着く。あの山の上に岩屋寺があると聞いてキツイぞと予感がした。登り始めから胸突八丁、一人で登っていれば勝手に休み休み登るが後から

来る人に抜かれるのはと思ってハハハ息をはずませやと六〇〇米の急坂を登る。一息いれていると七十半ばに近い先輩が参詣をすませて、そそり立つ岩壁に自然に出来た人顔を眺めていたのを見て強いなあと感心した。俳聖子規は暑い時に登ったのだろう、次の句碑が建っていた。

夏山や四十五番は岩屋寺
帰路久万の大宝寺に参詣する。樹齡八〇〇年根本の回り七米余の杉の巨木が数本参道に



あり静けさと荘厳さに浄心した気持ちになり車の人となった。

歩こう会考察

- ① 歩こう会に参加して皆が足腰を鍛えてきたのでこのコースに挑戦できた。
- ② リーダーが試歩してコースを決めている。こうした献身的な努力が推進力になっていて皆が感謝している。
- ③ 以前太山寺山上で昼食した時リーダーが大きなゴミ袋を持っていて空箱空缶を入れる

ように言われた時には有難うと敬意の念でいっぱいだった。歩こう会の旗に恥じないマナーを守っている。

- ④ 歩こう会参加者に夫婦連れが多くなりほおえましい。
- ⑤ 参加者が自主性を發揮してリーダーに協力し継続発展させ楽しい歩こう会に育てて行きたい。(片岡増一記)

第三回愛媛電電OB囲碁大会開催

昨年八月発足し、第一回大会を催して以来、回を重ね、去る二月一日松山囲碁会館において第三回囲碁大会を開催しました。

出席者も今回は二十九名と多数の参加で、午前十時から熱戦につぐ熱戦で、次の諸氏が優勝されました。

- 閉会后、勝山荘において懇親会を開きました。こちらも日頃鍛えた腕(?)で、平素の疎遠を忘れ、親交を深めたことでした。
- A組 梅崎雪男四段
- B組 浅井幸英五段
- C組 町田春弥初段
- D組 阿部 寛初段
- E組 乃万 弘三級

(水野記)

徳島眉秋句会抄(新年句会)

- 鳥の来て一ト声庭の三日かな 太田 稲雨
- 燈台の白光濡らす寒の波 三島 花人
- 冬鳥ななめに立ちて風にのる 安瀨 久青
- 氷張る鉢に金魚の動かざり 森田 南斗
- 橙で押えてありし妻のメモ 森 光葉
- 縫いぐるみ抱えて通る凍の道 長尾 我人
- 夜をこめて焚く大篝初日の出 豊崎 雲庭
- 旧年と同じ座につく置炬燵 原 雅峰

片言の孫のしぐさも笑い初め
雪晴るる嶺の鉄塔天を刺す
海苔ひびの合間合間に波迷う
孫たちの去りて七種粥の音
降りて来て犬の飯食う寒雀
紅梅はふくらみ見せて庭静か
日の移り冬嘸りの移りけり

日開 桃花
廣瀬 琴水
土橋 如水
幸田 蝸牛
岡 まり子
吉田富士子
長島 正雅

松山友佳里句会抄 (新年句会)

大屋根二つ競はず輝り寒月光
頬凍ててつくり笑顔の整はず
初明り湾は筏の幾何模様
新居得てこの氏子や初詣
雪まだらこの島のここ放哉果て
安らぎや初湯に老いの身を沈め
焚火して駅伝来たるを待ちゐたり
後添の諸事ひかえめや初鏡
髪白くなればなるまま春を待つ
モスクワのホテル五十路の初鏡
雪の富士匂ふがごとく初暦
蜜蜂の球とかず寒しのぎあふ
生きさまの変へようもなし層蘇を汲む
故里のとうどへ注連を持ち帰る
思わざる人の賀状にその日目を
豪雪の越後の友へ寒見舞
此処までは頬被りして無人駅
職を引くことも書き添へ寒見舞

大西王魚子
上田 南堂
大野 峯生
越智とよみ
木下 南海
佐賀 青也
佐久間瀬湖
高木たかし
田中 魚人
月原 陽子
仲谷あきら
二宮 正之
乗松 春仙
山下 露生
横山 蔵峯
渡部 汀耕
玉川 都夢

高知やまも句会抄 (去年今年)

神酒受けて十日戎の風の中
鮎料る初包丁に水を打つ
短日の掃けばまた敷く木の葉かな
冬蜂の弱さに踏むをためらいつ
炉開きの煖美しく昏れにけり
木蓮の冬芽にのこる枯葉かな

大西 瓶子
田村 啓子
安村 淑

初咲きの佗助友を待つ部屋に
佗助の切るには惜しき一輪よ
石庭に色を添えけり石露の花
石庭に石露の花咲く夕明り
裏坂のゆききも賑に針供養
お針師の衣品正しく針供養
初鶏に新しき水注ぎやり
珊瑚樹の一葉も揺れず初日かな
目白籠吊りて気長や囀番
笹鳴の聞こえそめたる庵かな
外は雪手にあたたかき賀状かな
野火もえて仕事始の農夫かな
枯芦のささくれ立ちて沼眠る
極月の牛の瞳の澄めるかな
料理メモ添えて届きし鮭の蒞
柚径の雪にまみれし落椿
はぐれ鷺一羽おりきし冬磧
散りしきし落葉の池の薄氷
玄関を洗いてお注連飾りけり
破魔弓をとどけ祝の客となる
お降りとなりし廂の音しづか
寒行か紫頭巾を召されゆく
松の内茶事に俳句に外出して
独り居の淋しさに馴れ去年今年
福寿草つぼみを固く年明けぬ
一絃琴弾き初むらしや唄聞ゆ
書初や紙いっばいに李白の詩
孫の字をまづ賞めてやる筆始
沈丁の日毎ふくらむ庭凍つる
たちまちに時雨となりし兆かな
伊予路なる雪曙の海近く
初釜の集いの席や梅香る
臘梅や宮居の庭の片はとり
筆山の雪解けそめし千鳥鳴く
山鳥の立ち替り来る青木の実
ひっそりと芭蕉の句碑や恵方道

池内 寿子
今西 重信
森岡 美保
野村 俊
溝淵乃文字
岡崎 花子
小松としみ
田中幾久子
太田 佳代
松村 白鶴
青木ゆきえ
岡村 とき
近森三千代
道倉たたを
寺村 愛子
別役 幸子
田ノ内露風
井上すみ子

投稿規定

- 一 会員消息 四〇〇字以内
 - 二 短歌、俳句、川柳 五首又は五句以内
 - 三 随筆、随想 六〇〇字以内
- 原稿締切 五月一日
原稿の取扱についてはお任せねがいます。

編集後記

▽五十六年度の恩給改善アップ率四・二％プラス五三〇〇円等をもりこんだ予算案も政府原案どおりで衆議院可決、参議院廻しとなりました。われわれの生活の糧である共済年金改善もこれに副うのでないかと思われまます。
▽七月発行予定の第三十五号には、会員消息を多く載せたいと企画しています。ご協力をお願いいたします。
▽三月末で連合会事務局を退くことになりました。会報第十一号から本号までを担当し皆様のご協力で年四回の定時発行をなし得たことを有難く感謝致しております。(玉川)

電友会四国連合会会報 第三四号

昭和五十六年四月一日発行

編集発行 電友会四国連合会
事務局
松山市一番町四丁目(〒七九〇〇)

四国電気通信局内

電話(〇八九九)三六一二〇二三

印刷 四国電話印刷株式会社